

小説に初登場した方正日本人公墓

—佐江衆一著『昭和質店の客』を読む—

大類 善啓

日本経済新聞朝刊最終面の文化欄は、日経の中でも一番読まれていて人気が高い。経済に疎い私などは、読む先から忘却の彼方に行ってしまうので、日経ではここしか眼を通さない口だ。

2年前の11月2日の朝、その欄に「満州・中国東北部の子供たち」という見出しで、作家の佐江衆一さんが、<「アカシアの大連」が見たくて初めて出かけた>と、大連、瀋陽、長春、ハルピン、牡丹江を旅したエッセイが出ていた。

佐江さんが、老親介護の凄まじい現実を描写した小説『黄落』の作家だと知っていたが、もしかしたら満州体験もある方なのかと思った。が直接の体験はないようだ。しかし、佐江さんにとって満州という言葉は、身にしみつくようにあったようである。

1934年生れの佐江さんは、そのエッセイの中で、<実は戦時中子供の頃、「日本の生命線」といわれた満州に憧れた>子供であったと述懐している。

その旅は、かつての日本時代のヤマトホテルや大連駅などの建造物の見学、牡丹江では高校生との交流もあった。また、牡丹江近郊ののどかで豊かな緑の山々を眺めながら、麻山で父や開拓団の大人から殺された子供たちの顔が浮かび上がってきたと書かれている。そうして、一人っ子として大事にされている現在の中国の子供たちに接しながら、佐江さんは<東京大空襲を生きのびて作家になった者として満州を含む「昭和」という時代を書ききらねば死ねないと思っている>と、締めくくっている。

それから2年後、『昭和質店の客』という小説が完成し、今年7月刊行された。そこでは「満洲」が正面から描かれている。

小説に登場する主要な人物3人は、生活は苦しいながらも楽しく浅草を生きていた人たちである。そんな庶民にも戦争は押し寄せてきた。浅草六区に近い昭和質店に出入りする人々も、いやおうもなく、戦場に駆り出されて行った。

柳田保雄は、今92歳、養護老人ホームの介護ベッドにいる。その柳田老人が「どうしても語っておかねばならないことがあります」と回想する。

保雄は、満洲移民の大義を信奉し、「五族協和」「王道楽土」と信じた満洲へ、大きな夢を抱いて開拓民になり妻子を呼び寄せる。同時に、“松竹座のトクちゃん”と呼ばれ、エノケンやロッパの物真似をして映画館の呼び込みをやって親しまれていた父も満洲へ呼び寄せた。しかし幻の「満洲国」は崩壊した。

ソ連兵に子供たちは虐殺され、婦人たちは強姦された上で殺される。どうせならと、妻子も父も「自決」させた。そうして自分ひとりが死に損ね、ソ連に抑留されて帰国した。

今介護ベッドで毎夜見る夢は、ソ連軍の戦闘機の爆音の中、泣き叫ぶ血みどろの乳呑児



を抱きしめ、どこまでも続く暗い泥んこ道を逃げ続ける自分の姿だった。

保雄が遙か満州の大地に両手を合わせ、現在は中国東北部と呼ぶ旧満洲を調べていくと方正に日本人公墓があるのを知ったという形で、公墓の建立の経緯が保雄によって語られる。

「知りませんでした。偏屈者、頑固者の私は、目と耳を固くとざし石になって（満洲のことを忘れようと）逃げまわってきたのですから」と、日本人公墓のことが1頁ほど書かれている。ドキュメントではなく小説で方正日本人公墓のことが書かれたのはたぶん初めてだろう。

佐江さんはどこで日本人公墓のことをお知りになったのだろう。実は日経に記事が出たあと、すぐに「星火方正」などをお送りした。その後、『昭和質店の客』が刊行されると、お贈りいただいたので、たぶん方正公墓の存在はこの会報ではないかと思ったが、この原稿を書くにあたって改めて佐江さんに確認した。それによれば、08年6月の中国東北部への旅で、牡丹江の元円明小学校の卒業生から、その存在をお聞きになったが、より詳しくは「星火方正」で知ったとのことだった。

小説では、柳田保雄の他に、「昭和質店」に出入りしていたレビューガールのテンブル染子は慰問団で戦地へ行き、その恋人、進ちゃんは、ニューギニア戦線で地獄の敗走の果てに死んだ。

佐江さんは、本書のあとがきでも、「この小説は、戦争を少しは体験した昭和戦前生まれの私が、死ぬまでに書かねばと考えていた作品です」と書いている。

生き生きと浅草で生きた庶民たちが戦争で翻弄された姿を描いた本書を、戦争の実情を知らない若い人たちにぜひ読んでほしいと思う。 (新潮社刊 定価：1600円＋税)

書籍案内

* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」－ハルビン市方正県物語－』

方正友好交流の会 編著

日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稻王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進した記録などが収録されている。定価 1500 円。(事務局に残部あり)

* 『約束 満州の孤児たちの生命の輝き』

増田 昭一 著

牡丹江から逃れて新京敷島地区難民収容所に辿り着いた著者が、かつて孤児室で死んでいった仲間の子供たち、生きて帰ることができなかった子供たちの無念と心の叫びを、書き表した書だ。当時、著者は17歳。孤児たちのお兄さん的な存在だった。毎日、何人もの孤児たちが収容所の中で死んでいく中で、神や仏のことを話し合い、議論し、助けあった子供たちを追想した鎮魂の書だ。本書は次に紹介する『オリオンの墓』の永井瑞江さんな